

# 慶應義塾図書館貴重書展示会 第30回を迎えて

くらし たかし  
倉持 隆

(三田メディアセンター主任)

## はじめに

2018年10月、慶應義塾図書館貴重書展示会(以下、貴重書展示会とする)は第30回を迎えた。本稿では、過去の貴重書展示会を振り返るとともに、近年の様子を踏まえつつ、今後の展望を考えてみたい。

## 1. 貴重書展示会の概要

文学部英米文学専攻の高宮利行教授(現・名誉教授)監修の下、最初の貴重書展示会「キャクストンとアーサー王伝説—マロリーの『アーサーの死』出版500年を記念して」が開催されたのは、今から遡ること33年前、1985年7月のことであった<sup>1)</sup>。貴重書展示会は第1回より現在に至るまで、丸善株式会社(現・丸善雄松堂株式会社)の協賛により、丸善店舗のギャラリーを展示会場にご提供いただいている。当初は丸善日本橋店で開催であったが、その後日本橋店の改築に伴い、2005年1月の第18回以降は主として丸善丸の内本店ギャラリー(東京駅隣接の丸の内オアゾ内)へと会場を移し、長きにわたりご好評をいただいていた。全30回の展示タイトルを一覧表としてまとめてみると、資料的には和書・漢籍・洋書から浮世絵・古文書まで、分野的にも人文科学から社会科学、さらに科学史や医学関係まで、多岐にわたっていることがわかる(表1、本文末に記載)。

貴重書展示会は、慶應義塾図書館(三田メディアセンター)が所蔵する貴重書・稀覯書を学外の会場に出品することにより、慶應関係者だけでなく、広く一般の方々にもご覧いただける貴重な機会となっている。テーマは三田メディアセンターのスペシャルコレクション担当を中心に検討し、テーマごとに監修を慶應義塾の教員に依頼して、展示資料の選定、図録・キャプション等の解説原稿の執筆などに協力をいただいている。また、丸善雄松堂株式会社には、ポスターとダイレクトメールの製作、会場の提供、設営・撤収や会期中の運営面を中心にサポートをしていただいている。会期中に開催される講演会や展示監修者によるギャラリートークは、毎回楽しみに訪れる

方もおられるほど人気のイベントとなっている。

## 2. 展示会図録の作成

貴重書展示会の大きな特徴の1つとして、展示会図録の作成が挙げられる。開始当初のパンフレット型資料から始まり、冊子体の図録となってからもさまざまな形式で刊行されてきたが、第22回(2009)以降は、フルカラー100ページ前後の冊子に統一されている。貴重書展示会の具体的な準備はおおよそ1年前から始まるが、図録の作成作業がその中心になると言っても過言ではない。監修の教員が展示資料を選定し、その資料1点1点に解説原稿を執筆、スペシャルコレクション担当を中心とした展示会事務局が図版用画像の撮影手配やレイアウト調整などを行い、教員と図書館員が協働しながら作業を進める。展示会図録の編集は時間と労力を要する大変な作業であるが、完成した図録は会期が1週間程度の短い展示会の終了後にも記録として残る貴重な成果となる。貴重書展示会のテーマは慶應義塾図書館が所蔵する貴重書・稀覯書コレクションごとに設定されることが多く、展示会図録の作成はコレクション目録作成にも通ずる作業となっている。完成した図録は、まさにカラー図版・解説付の充実したコレクション目録といえるもので、展示会終了後も資料の検索・調査等に活用されている。また、近年は図録の付録として、展示テーマに関係するコレクションの全点目録を掲載するケースもある。(第28回「鏡花の書齋」の泉鏡花自筆原稿目録、第29回「古文書コレクションの源流探検」の反町文書目録など)。

## 3. 講演会・ギャラリートーク

講演会・ギャラリートークの開催も、貴重書展示会の特徴の一つである。従来は、展示監修者や慶應義塾内外の研究者に依頼し、展示テーマに関連した講演会を開催することが主であった。展示会場に設けた講演スペースで、展示された資料に関する専門家の話を聞くことのできる講演会は、ご好評をいた

だいてきた。転機が訪れたのは、第24回「ルカ・パチョーリの『スムマ』から福澤へ—複式簿記の伝播と会計の進化」(2012)であった。この展示会は改築後の丸善日本橋店で開催されたが、改築前と異なり講演会スペースを確保することができなかったため、監修者であった商学部の友岡賛教授が参加者とともに展示ケースを見学しながら解説するギャラリートークの形式となった。ギャラリートークは、展示会の意図や出品資料の特徴など、監修者の展示に対する思い入れを聞くことができる(図1)。一人で見学するよりも展示を格段に深く理解できることから大変な人気を博し、それ以降の展示会でも採用されるようになった。また、公式のギャラリートーク以外にも、監修者や関連分野の教員が授業の一環として学生を連れてギャラリートークを行うことも多く、貴重書展示会が教育活動にもつながる事例となっている。なお現在は、公式のイベントとして講演会・ギャラリートークのいずれか、もしくは両方を開催している。



図1 『『百科全书』情報の玉手箱をひもとく』展、鷺見洋一名誉教授によるギャラリートーク(丸善丸の内本店ギャラリー、2013年)

#### 4. 特別展示

近年の展示では、通常の貴重書・稀覯書の展示出品だけでなく、展示会ごとに趣向を凝らした資料展示も行っている。いくつか印象に残る事例を紹介したい。

第21回「いま鮮やかに甦る明治——ボン浮世絵コレクション」(2008)では、浮世絵を展示するために、ギャラリーの中に暗室のような施設が設けられた(図2)。浮世絵は、特に照度を落として保護しなくてはならないが、ギャラリー全体での照度調整が難しく、その暗室の中で暗さを保つ必要があった。例年、貴重

書展示会の設営は展示開始日前日の夕方、直前の催事の撤収が終わる18時頃から開始される。設営作業はまさに時間との勝負になるが、この時は小屋の設置が完了したのが21時頃であり、その後に開始した浮世絵の展示作業は深夜まで及んだ。



図2 資料保護のため照度を抑えた浮世絵展示(丸善丸の内本店ギャラリー、2008年)

第27回「活字文化の真髄」(2015)では、参考出品として、ミズノプリンティングミュージアム所蔵の「ゲーテンベルクの印刷機」(レプリカ)を借用して展示した(図3)。印刷機は完全に分解された状態で会場に届けられ、数名の職人によって組み立てられた。展示された活字本がゲーテンベルク時代にどのような印刷機で印刷されたのか、見学者が具体的なイメージを持つことができる展示となった。



図3 ゲーテンベルク印刷機レプリカ(ミズノプリンティングミュージアム蔵)の展示(丸善丸の内本店ギャラリー、2015年)

第28回「鏡花の書齋」(2016)では、泉鏡花記念館(石川県金沢市)にご協力をいただき、お借りした生前の鏡花の書齋写真をもとに、その空間の再現を行った。展示会場内に畳四畳半の座敷をしつらえ、そこに鏡花遺愛の品々を可能な限り写真のとおりにならべて、鏡花が作品を執筆した書齋を、臨場感を持って感じていただける展示となった(図4)。



図4 遺品で再現された泉鏡花の書齋  
(丸善丸の内本店ギャラリー, 2016年)

いずれも監修者や協力機関の尽力により実現できた展示である。このような趣向を凝らした展示は、今後も展示テーマに合わせて実現させていきたいと考えている。

## 5. 30回を迎えた貴重書展示会

一言に30回といっても、毎回大変な準備作業を必要とする貴重書展示会を30回も継続することは容易なことではない。ここでは、継続して貴重書展示会を開催することができた理由を考察してみたい。

第一に慶應義塾図書館に豊富な蔵書、貴重書コレクションが収蔵されていることが挙げられよう。1回の展示会では、どんなに少なくとも50点ほどの資料が出品される。また、その貴重書は一つのテーマでまとまるような資料でなくてはならない。慶應義塾図書館では、開館して以来100年以上にわたって、購入や寄贈によって多岐にわたる貴重書コレクションが構築されてきた。長い歴史の中で蓄積された豊富な蔵書を組み合わせることによって継続的な開催が可能となったといえる。

また慶應義塾の研究力、監修を引き受けていただける教員の存在も不可欠である。貴重書展示会は、展示資料だけ存在しても、その分野を専門的に研究する教員がいなければ実現しない。貴重書の新規購

入は、その分野を研究する教員の推薦によるものが多く、コレクション構築と教員の研究発展の両輪が貴重書展示会の継続を維持してきた。

今後も貴重書展示会を継続していくためには、三田メディアセンターとして、慶應義塾の研究が推進されるよう、教員と協力しながらコレクション構築を図っていくことが必要となろう。

貴重書展示会の継続を考える上でもう1つ忘れてならないのが、丸善雄松堂株式会社の存在である。第1回から30年以上にわたって協賛をいただいている同社の協力なくしては、貴重書展示会を継続することはできなかった。前述したとおり、ポスター類の製作を含む広報関係、会場や什器の手配、設営・撤収や会期中の運営など、企画段階から展示会終了まで、サポートしていただいている。特に人手が必要となる展示設営・撤収作業の際には、ギャラリーのご担当者のほか、普段慶應を担当されていない方も作業に加わっていただいている。

貴重書展示会は慶應内外の多くの方々の協力により、30回を迎えることができた。この場を借りて、改めて御礼を申し上げたい。

## おわりに

最後に今後の展望を述べてまとめとしたい。今後の貴重書展示会を考えるとき、重要となってくるのは、学外へ向けての成果の公開、学内における教育・研究との連動することではないかと思われる。

慶應義塾大学メディアセンターでは、学内外での研究促進等を目的とし、Webサイトでデジタルギャラリーを公開していたが、2018年4月、これを刷新して、「慶應義塾大学デジタルコレクション」として新規公開した<sup>2)</sup>。このサイトでは、貴重書をコレクションごとに掲載して、その全ページについて高精細画像の閲覧が可能となっている。今後は、このデジタルコレクション上に展示会図録の解説や画像を掲載することにより、研究成果としての展示会図録の発信を積極的に行っていきたい。

一方、学内における教育との連動に関する事例として、第29回「古文書コレクションの源流探検」(2017)を紹介したい。この展示会の監修者の一人、文学部の中島圭一教授は、翌年(2018年度)担当された通信教育課程夏期スクーリングの「日本史概説」の授業で、展示会で紹介した文書を中心に講義内容

を組み立てられた。貴重書展示会は、開催翌年の夏期スクーリング期間に合わせ、慶應義塾図書館展示室で通信教育課程生向けのダイジェスト展示とギャラリートークを開催している。本年のダイジェスト展示では、「日本史概説」の受講生がギャラリートークに参加して、熱心に聴講する姿が見られた(図5)。



図5 ダイジェスト展示, 中島圭一先生による  
ギャラリートーク(慶應義塾図書館展示室, 2018年)

※ギャラリートークは、もう一人の監修者である  
上野大輔准教授と講師2名で開催された。

貴重書展示会の内容を直接授業に活かしていただいた事例として、これまでにない形であり、展示会事務局としても大変嬉しい事例であった。近年の貴重書展示会では、出品資料の選定・解説だけでなく、会場に設置する解説パネルも充実させていく方針であり、展示会を監修する教員の負担がますます大きくなっている。少しでも授業や教育支援につながるものがあれば、今後も積極的に取り組んでいきたい。

また、学内における研究との連動については、毎回、監修をお引き受けいただいた教員の研究内容を貴重書展示会に活かしているが、本年開催した第30回「インキュナブラの時代—慶應義塾の西洋初期印刷本コレクションとその広がり」(2018)では、従来とは違った形で研究との連動を果たすことができた。監修を引き受けいただいた文学部の安形麻理准教授は、慶應義塾におけるこれまでのインキュナブラ研究の歴史を踏まえ、その資料的な価値だけでなく、そこから生み出されたさまざまな研究の発展や成果にも着目し、慶應義塾におけるインキュナブラ研究の広がりを集約する形で展示会をまとめられた。そのため、過去にインキュナブラの資料解説を執筆した研究者に再度協力を依頼するとともに、関

連分野の教員に新たに執筆陣に加わっていただき、まさに現在の慶應義塾の教員および卒業生の研究者による研究成果をまとめる形となったのである。30回という記念の展示会において、慶應義塾における長年の研究成果を紹介するような展示会を開催できたことは、三田メディアセンターにとって大変意義深いことであった。

慶應義塾においては、2020年度中に全塾的学術・文化資料施設「慶應ミュージアム・コモンズ(仮称)」の開設が予定されている。貴重な資料の展示による学外への研究成果の公開は、国の内外における慶應義塾の存在感を高めることにつながり、今後より一層重要となっていくであろう。三田メディアセンターとしては、今後も教員や学内諸機関と連携をとりつつ、慶應義塾の研究・教育に資する貴重書展示会を継続していけるよう、取り組んでいきたい。

#### 注

- 1) 第1回から第23回までの展示テーマ、内容については下記の文献に詳しいので、合わせて参照されたい。  
五. 慶應義塾図書館貴重書展示会の二十五年. 慶應義塾図書館史稿一九七〇～二〇一三. 東京, 2012, p.170-176.
- 2) 慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション  
<http://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja>. (参照 2018-08-21).

表1 慶應義塾図書館貴重書展示会一覧

回数	タイトル(企画監修者)	会期
第1回	「キャクストーンとアーサー王伝説」展 — マロリーの『アーサーの死』出版500年を記念して (監修 高宮利行文学部教授)	1985.7.15-7.23
第2回	「書物に見る西欧哲学・科学思想の流れ」展 (監修 大江晃文学部教授)	1988.11.28-12.3
第3回	資料に見る日本食文化と食養史 (監修 太田次男名誉教授)	1990.1.29-2.3
第4回	広重・東海道錦絵 日本橋より藤沢・箱根まで — 慶應義塾湘南藤沢キャンパス開設記念 (監修 メディアセンター白石克)	1990.4.9-4.14
第5回	『鷺ペンから印刷機へ』展 — 目で見える西洋写本文化と印刷文化 Pen to Press : from Manuscript to Print Culture (監修 高宮利行文学部教授)	1991.11.18-11.23
第6回	慶應義塾図書館八十年記念 和漢書善本百選 (監修 平澤五郎道文庫教授)	1992.11.16-11.21
第7回	高橋誠一郎旧蔵 古版西洋経済書展 (監修 飯田裕康経済学部教授)	1993.11.15-11.20
第8回	理性の夢 — 図版と文字で読むフランス18世紀 (監修 鷺見洋一文学部教授)	1995.1.30-2.4
第9回	広重「東海道五十三次」錦絵展 — 出世作保永堂版に続く六種 (監修 メディアセンター白石克)	1996.1.29-2.3
第10回	ANATOMIA — ダ・ヴィンチから解剖図譜の歩み (監修 相磯貞和医学部教授)	1997.1.27-2.1
第11回	「日本中世印刷史」展 (監修 関場武文学部教授、大沼晴暉道文庫助教授)	1998.1.26-1.31
第12回	寓意の鏡 — 16・17世紀ヨーロッパの書物と挿絵 (監修 松田隆美文学部教授)	1999.1.25-1.30
第13回	慶應義塾図書館蔵 御伽草子 (監修 石川透文学部助教授)	2000.1.24-1.29
第14回	福澤先生没後百年記念 慶應義塾の経済学 (監修 池田幸弘経済学部助教授、三島憲之経済学部研究助手)	2001.1.29-2.3
第15回	辞書の世界 — 江戸・明治期版本を中心に (監修 関場武文学部教授、川上新一郎道文庫教授、佐々木孝浩道文庫専任講師、住吉朋彦道文庫助手)	2002.1.28-2.2
第16回	繁殖する自然 博物図鑑の世界 (監修 鷺見洋一文学部教授)	2003.1.27-2.1
第17回	子どもたちの物語 — 啓蒙・教訓・お伽ばなし (監修 関場武文学部教授)	2004.1.26-1.31
第18回	近代科学の黎明 — コペルニクス、ニュートン、そしてキルヒャー (監修 西脇与作文学部教授、和泉雅人文学部教授)	2005.1.26-1.31
第19回	「論語の世界」 — 現代に生きる論語 (監修 高橋智斯道文庫助教授)	2006.1.23-1.28
第20回	義塾図書館を読む — 和・漢・洋の貴重書から (監修 松田隆美文学部教授、佐々木孝浩道文庫助教授、住吉朋彦道文庫専任講師)	2007.1.26-1.31
第21回	いま鮮やかに甦る明治 — ボン浮世絵コレクション (監修 河台正朝名誉教授)	2008.1.26-2.6
第22回	現代フランス文学 受容と展開 — ヴァレリー、コクトーの未公開草稿を中心に (監修 牛場暁夫文学部教授、田上竜也商学部教授、大出敦法文学部准教授、笠井裕之法学部准教授)	2009.10.1-10.6
第23回	経済学の源流 — 欧米諸都市が育んだ100の古典 (監修 坂本達哉経済学部教授)	2010.10.8-10.14
第24回	ルカ・パチョーリの『スムマ』から福澤へ — 複式簿記の伝播と会計の進化 (監修 友岡賛商学部教授)	2012.10.24-10.30
第25回	『百科全書』情報の玉手箱をひもとく — ドニ・デイドロ生誕300年記念 (監修 鷺見洋一名誉教授、小嶋竜寿文学部講師)	2013.10.9-10.15
第26回	慶應義塾の王朝物語 — 源氏物語を中心として (監修 佐々木孝浩道文庫教授)	2014.10.22-10.28
第27回	活字文化の真髄 — 日本の古活字版と西洋初期印刷本 (監修 高橋智斯道文庫教授、松田隆美文学部教授、徳永聡子文学部准教授)	2015.10.7-10.13
第28回	鏡花の書齋 — 「幻想」の生まれる場所 (監修 松村友視名誉教授、文学研究科後期博士課程 鈴木彩、富永真樹)	2016.10.5-10.11
第29回	古文書コレクションの源流探検 — 反町二郎、反町茂雄、木島誠三、木島櫻谷、そして… (監修 中島圭一文学部教授、上野大輔文学部准教授)	2017.10.4-10.10
第30回	インキュナブラの時代 — 慶應義塾の西洋初期印刷本コレクションとその広がり (監修 安形麻理文学部准教授)	2018.10.3-10.9

※開催時に通算の回数を冠するようになったのは1990年代以降。

※企画監修者は監修当時の役職を表記する。